

みらくル TV とは何か～「素敵な方々と共に生きる喜び」

木谷正道

みらくル TV 代表／首都防災ウィーク実行委員会事務局長



変化が速く、激しい。

僕たちは今、どこに向かっていくのだろうか？

※ ※ ※

本年4月11日、「みらくル TV」を開局した。

ZOOM テレビ会議を中核とし、WEBサイトと

YouTube を連動させた双方向メディアである。

浅野史郎氏(神奈川大学特別招聘教授)の「今、障害福祉を考える」と中林一樹氏(東京都立大学名誉教授)の「迫り来る首都直下地震」を二つの柱に、音楽、囲碁など多彩な内容で放送している。

4か月後の今、次が見えてきた。

1 人と人が深くつながりあう、類まれな「双方向」

みらくル TV ではいつも、自分を含む全員と「至近」、「対面」で見つめあう。「三密」を避ける装置が、かつてない親密なコミュニケーションを可能にした。

「僕らのパーソナル・ヒストリー」(白井崇陽氏の番組タイトル)のとおり、たくさんの人々のヒストリーが融合し、何かが始まっていることを予感させる。



2 「自前の総合テレビ」を市民が保有した

防災、復興、障がい福祉、視覚障がい、聴覚障がい、高次脳機能障がい、知的障がい、手話、音楽、囲碁、俳句・・・分野、有名無名、年齢、障がいの有無や違いを超え、総合的に、主体的に、日常的に人々が情報を発信し続けている。

日本のメディア界に生じた小さな異変である。

3 重大な課題を同時に解く「連立方程式」

現実の社会にはたくさんの課題(変数)があるから、縦割り(単一の方程式)では解けない理屈だ。

これまでずっと、「連携」「横ぐし」「ネットワーク」が叫ばれてきたが、成功しないまま、主な担い手(僕の世代)が高齢化した。

僕たちはやり方を変えなければいけない。

新たな萌芽を首都防災ウィークで見ることが出来る。

様々な地域、分野で大小無数の「みらくル TV」が始まれば、随所に希望が生まれ、希望を呼ぶだろう。

【開局の経緯】

囲碁のまち大船渡と首都防災ウィークがみらくル TV に先立つ二大プロジェクトであった。

「囲碁のまち大船渡」は2014年に始まり、本年(2020年)9月に「第七回碁石海岸で囲碁まつり～世界碁縁芸術文化祭～名人戦第三局」を開催する予定であった。昨年11月、かつてなく早く詳細な企画ができて、実施を待つばかりとなった。

同月、僕たちをずっと支援してくれていた小川誠子さん(日本棋院六段)が急逝された。

12月1日、大田文化の森イベントで、三上俊治氏(東洋大学名誉教授、高校の同級生)に再会し、彼の指導で「希望の船サイト」(<http://kokoroigo.site/>)の制作にとりかかった。

「世界碁縁芸術文化祭」の一環である。

2020年1月末、前年に中国武漢で発生していた新型コロナウイルスが世界に拡がり始めた。

2月中旬、僕たちは年度内に予定していた全イベント(高次脳機能障がいと囲碁の会、平塚でつながろう祭、台湾訪問、音楽神社祭など)の中止を決定した。

3月2日、木谷正道、中林一樹氏(東京都立大学名誉教授)、浅野史郎氏(神奈川大学特別招聘教授)、瀧澤一郎氏(東京いのちのポータルサイト理事長)ら63名で新型コロナ各界連絡会を設立し、首都直下地震との複合災害への対応、中国からの渡航禁止などを求める緊急アピールを発表した。

<http://miracletv.site/?p=1225>

3月8日、ZOOM テレビ会議を初体験し、操作の容易さとパフォーマンスの高さに驚いた。コロナ蔓延下での最適の装置だと直感し、4月11日に「みらくル TV」を開局した(番組編成委員会:木谷正道、浅野史郎、杉浦登、三上俊治、政光順二、原香織)。

プロがいたわけではなく、資金はなかったから、出演者もスタッフも無償でプロジェクトを担った。

カギはコンテンツができるかどうか。

「こういうことができる」とは誰にでも言えるが、「こういうこと」自体は簡単には示せない。

四半世紀の間に形成されたネットワーク、多彩な人のつながりがみらくる TV のコンテンツとなった。

以下、筆者自身のパーソナル・ヒストリーに即して、みらくる TV に至る経過を記す。

【阪神淡路大震災～東京いのちのポータルサイト】

■1995年1月17日 阪神淡路大震災

当時、僕は東京都職員研修所調査研究室長として、東京直下地震の研究をしていた。

東京集中が高度成長の奇跡を生んだが、首都地震で集中のデメリットが一気に出ることは明らかだった。

少し前から、海洋型巨大地震でなく、地表近くで発生する直下地震が東京の脅威であることが知られ始めていた。とはいっても、都庁では地震の話は現実感がなく、ほとんどオカルトと同じ響きを持っていた。

1995年1月17日、僕はいつものように浜松町の職員研修所に向かった。調査研究室のドアを開けると、テレビを囲んでいたスタッフたちが叫んだ。

「木谷さん、地震が起きました！」

「どこだ！」

「神戸です！」

テレビ画面からは、ヘリ映像が映り、白く細い筋が何本かまっすぐに立ち上っていた。無風だった。

これが、関連死を含め6434人が亡くなる大震災になるとは想像もできなかったが、「何か、大変なことが起きた」と感じ、胸がバクバクした。

僕は自分が東京のことばかり考えていたから隙を突かれたという思いにとらわれた。神戸の人々が身代わりになってくれたと感じ、防災をライフワークにした。

友人の斎間孝一氏が中林一樹氏(東京都立大学教授、現名誉教授、首都防災ウィーク実行委員長)を紹介してくれて、三人で勉強会を始めた。

それ以来、僕は「明日、首都直下地震が起きてもおかしくない」と言い続け、25年間で過ぎた。

■1996年 早稲田いのちのまちづくり

僕は、新宿西清掃事務所長として、事業系ごみ有料化のために約40の商店会を回っていた。

早稲田商店会長の安井潤一郎氏らと共に、「早稲田いのちのまちづくり」を始めた。

「商店会連合会のホームページをつくらう」という話になり、西早稲田にあるトーコロ情報処理センターの横内康行氏を思い出し、電話をしたら二つ返事で引き受けてくれた。障がいを持つ人々がすばらしいホームページをつくってくれた。

10月、早稲田大学で学生が出すゴミの山を積み上げるデモンストレーションが行われた。

たまたま通りかかった電動車いすの学生を横内さんが紹介してくれた。

乙武洋匡さんとの出会いである。

翌年から、彼は顎でシフトキーを押して見事なメールを皆に出し始め、秋に「五体不満足」を出した。

藤村望洋氏、山本耕平氏(ダイナックス)、柴田いづみ氏(滋賀県立大学)などが今につながる。

■2002年8月 東京いのちのポータルサイト

1999年からの「都民と創る東京都産業振興ビジョン」で早稲田いのちのまちづくりの力を借り、瀧澤一郎氏(東京和晒社長)はじめ新たな方々に出会った。

2000年に三宅島が噴火し、全島民が東京都の陸地に避難した。IBM 社長室の市川啓一氏が小島誠一郎氏と共に島民をネットで支援していた。

島以外には全く被害がなかったにもかかわらず、ネット空間にはデマがあふれ、混乱した。

首都直下地震が起きる前に、信頼できる人間たちで確かなネットワークを作っておかないと大混乱すると直感した。

2002年8月、早稲田大学で「東京いのちのポータルサイト(代表:安井潤一郎氏)」を設立した。

12月25日に、都庁内でNPO設立総会を開催した。「耐震補強が進んだら死んでもいい」と書いた鍵屋一氏(板橋区防災課長)の緊急提案で、「耐震補強推進特別決議」が採択された。どんな備蓄をしても、家が倒壊したら人が死ぬ。阪神淡路の教訓であった。これ以降、いのポタは耐震補強一色になった。

翌2003年2月、藤村望洋氏、寿乃田正人氏(東急)らが中心となり、電通銀座ギャラリーで20日連続のイベントが開催された。

全イベントの冒頭で、轟音と共にまちが崩れ行く「阪神淡路衝撃映像」を上映し、目黒公郎氏(東大助教授)がむごい写真を聴衆に見せた。

国交省・澁谷和久氏らの強力な動きがあり、耐震補強推進の法制化、条例化が短期間に進んだ。

地元では「ひらつか防災まちづくりの会」の活動が始まった。

2004年に車いすの建築技術者・福井義幸氏が「耐震後付けブレース工法」を開発し、深田邸を初めて補強した。

墨田区都市計画部長の河上俊郎氏、岡建工事副社長の岡本博氏らが視察に来られた。

2005年9月、墨田区は日本初の耐震補強助成条例を制定し、2006年には耐震補強推進協議会が設立され、強力な取り組みを始めた。

【鞆・日本の心～東日本大震災～首都防災ウィーク】

2001年8月から、僕は地元平塚の宅老所ひなたぼっこでギター弾き語りを始め、一緒に歌う楽しさにはまった。普段はお年寄りと歌い、地震が起きたら避難所で歌おう。

2007年3月に退職後の5月にNPO法人暮らしと耐震協議会を設立した。

本当にやりたいこと(音楽)と本当はしなければいけないこと(防災)の二つに打ち込む覚悟だった。

これからは、さながらジェットコースターに乗ったような変化になった。

8月、後輩の向本圭太郎君に誘われて福山市鞆の浦を訪れた。朝鮮通信使で有名な美しい港町である。

明け方、堤防に腰掛け、話をしていると、仙酔島の窪みから太陽が昇った。

「鞆・日本の心」という言葉が湧き、11月にまちづくりイベントを開催することにした。

さくらホームという古い木造のホームで、利用者と唄を歌った。

施設長の羽田富美江さんは、「鞆を観光客に視られる箱庭のようなまちにたくない」と言われ、驚いた。

「鞆にはお年寄りもいれば子どももいる。人が生活している街なのです」

当時、埋め立て架橋計画をめぐる対立があり、僕の友人たちは皆、景観が最重要だと主張していた時期である。

それからは、鞆の浦に出かけるとさくらホームで唄を歌うようになった。

たまたま、「朝鮮通信使 400 周年行事」が各地で開催されていた。

10月に筑波技術大学(学生全員が視聴覚障がい者)で開催された囲碁セミナーに参加した際、知人の合田寅彦氏のご自宅で極彩色の絵巻図を見せていただいた。

これが、最後の朝鮮通信使(2011年)の接待のために江戸の小倉藩邸で作成された「朝鮮通信使饗応七五三絵巻」の原本であり、幕末の箱館戦争で江刺の合田家に託されたものであった。

2010年4月、韓国棋院を訪問して「21世紀の朝鮮通信使～囲碁で信(まこと)を通わせあう」という日韓囲碁交流を始めることにした。7月、四谷の韓国文化院で特別展、10月に鞆、彦根、四谷でイベントを開催した。

■2011年3月11日 東日本大震災

僕は福山市役所で会議中だった。

外が急に騒がしくなり、またしても「地震が起きた！」

の音が湧いた。

4月、NPOの友人から、東北に心のケアに行ってほしいとの依頼があった。バンドメンバーに声をかけたら、皆、行きたいと言う。

上田和俊氏に運転手を頼み、岡本博氏、河上俊郎氏、村上深氏らも来てくれた。

5月、車三台で向かい、東北自動車道を下りると、突然、何も無い瓦礫の荒野が広がった。

「これは戦争だ」と感じた。次は東京で陸地で起きる。南三陸町立歌津中学校体育館(避難所)の三階に泊めていただいた。

コンサートで「故郷」を歌ったら、年配の男性が立ち上がって一緒に歌ってくれた。

被災者もバンドも泣いた。

■2013年9月 首都防災ウィーク



関東大震災90年の節目に、東京いのちのポータルサイトが呼びかけて、首都防災ウィークを開催した。

実行委員長は中林一樹氏。「防災の日」に民間が取り組む全国初のイベントであった。

会場は、大震災で3万8千人が焼死した横網町公園と慰霊堂である。スカイツリーにちなんで、634面打ち囲碁大会を計画した。

開会し、墨田区長、日本棋院理事長のご挨拶が終わる頃、大雨になった。

必死の撤収作業が夜遅くまで続いた。

屋内では諸イベントが無事終了し、ほっとしたものつかの間、獅子奮迅の活躍をしてくれた岡本博氏が二週間後にくも膜下出血で倒れた。生命は取り留めたものの、高次脳機能障がいを負われた。

高次脳機能障がいとは脳卒中や事故で発生し、記憶障がいや感情障がいなど、複雑な症状が出る。

若年者にも多いため、解雇や離婚で大変な思いをしておられる方が多い。

たまたま、同年3月から、この障がいの当事者、ご家族と音楽活動を始めていたところだった。

最も近い友人であった岡本さんが同じ障がいを負われたことで、僕は高次脳機能障がいに深く関わることになった。

【囲碁のまち大船渡～高次脳機能障がいと囲碁】

■ 碁石海岸で囲碁まつり



2012年10月、碁石地区復興まちづくり協議会の大和田東江会長から、復興イベント「碁石海岸で囲碁まつり」開催の依頼があった。

碁石という、現地では当たり前地名を活用し、復興に役立てたいという発想だった。

2013年12月に、小川誠子さんから、「紹介したい方がいる」とのお電話をいただき、翌2014年1月、川越で開催された棋聖戦前夜祭で大船渡出身の石鍋博子氏を紹介された。

石鍋さんは、大船渡を囲碁のまちにしたいこと、以前からJR大船渡線に「囲碁列車」を走らせたいと思っていたことなどを熱心に語った。

囲碁ファンではない方が、ここまで熱をもって話すのは尋常ではなかった。

イベントからまちづくりへと構想が飛躍した。

2月にUIFA JAPON(国際女性建築家会議日本支部)会長の松川淳子氏の麹町オフィスで、実行委員会を設立し、7月に第一回囲碁まつりを開催した。首都圏から参加した約80人の囲碁ファンは、「碁石」の看板を見るたびに歓声を上げた。

これ以降の取組みは、これまでに書いたもので、事項だけを記す。

2015年、「囲碁のまち大船渡請願署名」に10926筆が集まり採択。人口3万8千人だからすごい数だ。

2016年、「日台交流囲碁大会」開催、囲碁神社創設、「碁石の日(5月14日)」を大船渡市が制定

2017年、全国台湾盲学校囲碁大会をNHKが密着取材し、「NHKワールド」で世界に放送した。

2018年、棋聖戦開催。全国台湾韓国盲学校囲碁大会開催。

2019年、第六回囲碁まつりで本因坊戦第一局開催。

そして、2020年9月、「第七回囲碁まつり」で世界碁縁芸術文化祭を計画したところで、コロナが勃発した。

世界芸術文化祭は世界みらくる音楽祭と名前を変え、9月5日に東京都慰霊堂/ZOOMで開催する。

■ 高次脳機能障がいと囲碁の会



2017年1月、フォーラム大田高次脳代表の栗城優子氏ら家族会、当事者、囲碁ボランティアの方々と一緒に、囲碁の会を始めた。会場は大森の大田区立障がい者総合サポートセンターである。

暗い表情だった方々に笑みがこぼれ、やがて、人格が一変するほどの変化が生じた。

顕著に上達する方も現れ、囲碁がこの障がいに適していることが分かった。

2018年12月、柴本礼氏(イラストレーター)が夫コウジ氏(当事者)を観察し、様々な障がいが改善していることを発表した。翌年5月、大船渡で開催された高次脳フォーラムは、浅野史郎氏の軽妙なコーディネートの中で、人があふれた。

楽しい居場所ができるだけでも素晴らしいことだ。

障がいは障がいとして生活を楽しみ、もし、障がいが改善したら大事件である。

※ ※ ※

世界みらくる音楽祭のリハーサルの後、あるミュージシャンがこう書いた。「音楽をやっているときに良かった。こんなに素敵な方々と共演できる喜び」。

ジャンルを超えれば、「生きていて本当に良かった。こんなに素敵な方々と共に生きる喜び」になる。

「素敵な方々」は周りにたくさんいただけでなく、自分自身もその一人だった。ZOOMの画面がそれを教えてくれる。

「共に生きる」は義務や目標ではなく喜びなのだ。

この気づきから、日本のミラクルが始まる。

木谷正道(きたに・まさみち)

1947年11月、平塚に生まれ、今も在住。

都立戸山高校、東京大学経済学部を卒業し、1971年に東京都庁勤務。企画調整局、経済企画庁内国調査課、職員研修所調査研究室長、新宿西清掃事務所長、産業政策担当部長、IT推進室長、企画担当部長等を経て、2007年3月退職。

暮らしと耐震協議会、高次脳機能障がいと囲碁の会、21世紀の朝鮮通信使、日本棋院平塚支部、心の唄バンド代表、東京いのちのポータル副理事長。